

スナップエンドウ



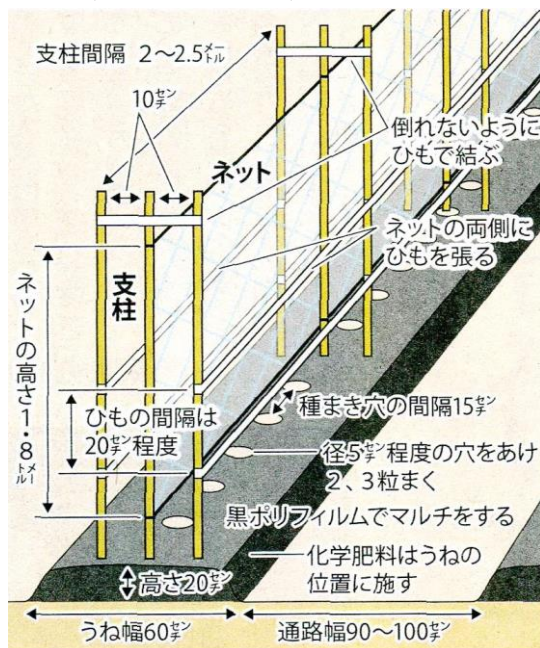
中島 純



開花後は低温に注意

スナップエンドウは、北アメリカで育成されたエンドウの一種で、日本へは昭和50年代に導入されました。別名「スナックエンドウ」とも呼ばれ、大きくなった豆を莢ごと食べるエンドウで、大変甘いのが特徴です。

豆が大きくなっても莢は軟らかくて、肉厚で歯切れが良く、緑色が鮮やかです。栄養価が高く、糖分やタンパク質、カリウム、カルシウム、鉄、ビタミン類のほか、食物繊維などを多く含み、和風、洋風、中華料理とあらゆる料理に利用されています。また、調理も簡単で、特に収穫したての莢をさっとゆでて、塩やマヨネーズなどをかけて食べると、大変おいしく、サラダにも最適です。



スナップエンドウには「つるあり」と「つるなし」の品種がありますが、ここでは、「つるあり」の晩秋から初冬播きの春どり栽培を紹介します。

生育適温は12～18度で、25度以上の高温や、2度以下の低温では莢着きが悪くなったり、形の悪い莢が増えます。

また、開花期までは比較的寒さに強いですが、開花期以降に氷点下2度以下の低温にあうと成長点が止まり、その後の収穫が望めなくなります。このような特性から、種播きは11月下旬～12月下旬に行い、厳寒期を開花していない小さい状態で経過させます。

連作障害を起こしやすいので、4～5年間マメ類を栽培していない日当たりと排水の良いほ場を選びます。種播きの1週間前までに1平方メートル当たり堆肥2kg、苦土石灰100g程度を施し、できるだけ深く耕うんします。化学肥料は畝の位置に、畝の長さ1メートル当たり100g（窒素、リン酸、カリが15%の場合）施します。畝幅60cm、高さ20cm程度の大きさに作り、黒ポリフィルムでマルチをします。複数の畝を作る場合は通路90～100cmとします。種の播き方は15cm間隔に穴をあけ、1穴に2～3粒ずつ、3cmの深さに播きます。本葉が出てきたら、1穴2本に間引きをします。

蔓が伸びたら、ネットを張り、蔓を誘引します。蔓が伸びるのにあわせてネットの横に水平にひもを張り、蔓が倒れるのを防ぎます。蔓がネットの上部に達したら、蔓の成長点を摘み取ります。強い霜が降りる地域では、不織布などで覆うと被害を防げます。花が咲き出したら、2週間に2回程度の間隔で追肥します（植え穴一つ当たり化成肥料3g程度を施します）。

開花から25日程度を目安に、豆がふくらんできたら鮮やかな緑色の莢を収穫します。

（鹿児島県農業開発総合センター園芸作物部野菜研究室研究専門員）

平成27年11月12日（木）／南日本新聞